

# 羅臼町のアイヌ民族マキリ鞘

戸部千春

091-0033 北海道北見市留辺蘂町栄町 18, 北見市立留辺蘂小学校

## Two Ainu's Wooden-sheaths, Used in Rausu, Hokkaido

TOBE Chiharu

Rubeshibe-elementary school, 18 Sakaemachi, Kitami, Hokkaido 091-0033, Japan

Rausu is located in Shiretoko Peninsula, eastern Hokkaido, famous to fishery as main industry. YAMANE Shoichi, Rausu fisherman, has old two knife-sheaths made by Ainu. One of them has sculptured patterns. This one was made in 19th century. The knife-sheath is similar to one belonged to Shiretoko Museum in Shari. The common features of both ones are not only the scales and patterns, but also detail figures. Especially, I point out the circle sculptured on the surface both ones. These sculptured circles are not from traditional crests in Japan, but come originally from the metal plates of the shaman belts in Amur-region and Sakhalin. The other one has no pattern, made in early 20th century.

### はじめに

小稿で紹介する2点のマキリ鞘は、北海道目梨郡羅臼町で漁業を営む山根正一氏が所蔵する資料である。共に山根氏の所蔵となる以前は、別々の人物が「地元の漁業史を語る上で資料価値が高い」との思いから保管してきたものだった。

山根氏は御夫妻共に、若き日々より地元羅臼町で漁業を続けて今日に至っており、かつては知床半島突端部に近い赤岩地区で、夏の期間を昆布漁で過ごす経験をした。自分達が歩んできた地元漁業史を、漁具と生活民具を保存して将来に残そうと、知人達の協力を得て体系的な資料収集と保管整理に努めてきている。

これら2点のマキリ鞘資料も、こうした山根氏御夫妻の資料収集活動に賛同された方々が御夫妻に寄贈されたものである。

### 資料1の分析

#### 1) 形状

細密な彫刻紋様を木鞘全面に施した、古色を帯び手ズレ磨耗が進行した、一木造りの小刀鞘である(図1)。歴年の使用が偲ばれる。このような形状の鞘を、私は全木製アイヌ民族マキリ鞘と呼んでいるが、人類が製作し使用する小刀鞘の典型

型形状であり、形状起源は、小刀本体を包む素材として皮革や樹木外皮を用いたことによる。とりわけ下げ紐を結束する個所を山形(造り出し突起)に形成する創意工夫は、皮革や樹皮を綴じ合わせた綴じしろの名残によるものである。

日本列島においてもその製作使用の歩みは人類史の例外ではない。その祖形は列島中央の古墳文化副葬品にみられる小刀鞘の石造模造品に求められ、それらの発掘資料により古墳文化時代には獣皮革綴鞘が盛行していたことがわかっている。このような古墳文化時代の副葬品に含まれる石製模造小刀は北海道内でも発掘資料がある(野村2000)。

幕末には松浦武四郎が紀行文『西蝦夷日誌五編』に日本海側の浜益で入手した資料を紹介している(吉田1984)。また時代が下って列島北辺のアイヌ民具には、発掘による近世以前の資料や、現存資料として近代初期に製作使用された獣皮革綴鞘や樹木外皮製鞘が知られている(佐々木1992)。

アイヌ民族が製作使用する、素材を全木製とする小刀鞘は、湾曲形状を呈する事を一特徴とする。樹木外皮製鞘が素材の特性から腹部がほぼ直状であることと相違する特徴といえる。

knife 製作者にしてマキリ研究者である飛騨野

弘尚氏は、狩猟した獣の解体処理に際しては有用な皮革を傷つけぬように刃部が湾曲した小刀であることが作業に不可欠な条件で、世界各地の狩猟活動を生業とする人間集団が使う knife は、湾曲しているのが標準形であるとしている（飛騨野弘尚私信）。

狩猟活動を重要な生業の一つとしてきたアイヌ民族にあっては、当然ながら狩猟活動とそれに伴う解体儀礼作法で使用する小刀の刃部は湾曲しなければならなかったろう。伝統的なアイヌ文化の思惟においては、小刀を納める鞘はとりわけ湾曲を強調する意志が強かったようである。これは列島古代末期において改良完成した湾曲する日本刀形状を尊ぶ思惟を継承したものである（戸部 1993c）。また口承芸術では、マキリ鞘の湾曲形状が常套句のように織り込まれ、語られている。当資料鞘でも湾曲が認められ、小刀本体は現存していないが湾曲していたと推定される。

戸部（1993c, 1997）は現存する木製アイヌ民族マキリ鞘の観察を元にして、製作された時期の相対年代編年化を試みた。編年化の観点は鞘形状と構造の分類に焦点化しており、近代への転換点たる明治元年を編年の仮説上限として、各分類化した各々群が出現して消滅する時期を相対編年化する試みを図化したものだった。

本論では年代を以下のように区分して考察した。(1) 明治前期、(2) 明治中期、(3) 明治後期、(4) 大正期、(5) 昭和前期、(6) 昭和中期、(7) 昭和後期、そして (8) 現代である。

(1) 明治前期から (4) 大正期までは 15 年の幅で区切った。昭和は昭和 20 年の敗戦までを (5) 昭和前期、高度経済成長が軌道に乗った昭和 40 年までを (6) 昭和中期、それにつづく民族復権運動が高まる (7) 昭和後期と区分した。

大正期には、複製品として腹部縦溝鞘が復活製作されている（伊藤 2004）。この時期のマキリ鞘器面に施された切線格子内鱗紋には、アイヌ工芸史に特筆すべき精緻な技術が実現しているものがある。大正期とは、女性の手技で明治期を通じて改良発展したカバラミブ技法が華麗に完成した時期でもある。近代におけるアイヌ芸術が中興した時期と思われてならない。大正デモクラシーの世相と重なる時代相を思う。柳宗悦による日本民芸運動が準備されていく時代であった。

さて、木材二分割鞘から一木造り鞘の盛行へと転換する近代化への条件には、製作道具の安定供給が不可欠であると考えられる。また比較的古い現存する木鞘の腹部に細長く縦溝が穿たれている事実からは、彼等が使用できた工具は材を深く穿つ加工意図には十分ではない道具であったと考えられる。多様な加工意図に適した近代的で多様な工具に比べれば、はるかに及ばない道具に頼らねばならなかったろう。「マキリ一本だけで製作する」とは、事の本質を言い得ている。

私はそうした腹部へ縦溝を穿った製作方法によった一木造り鞘を腹部縦溝木鞘と命名し、現存する博物館資料の収集年から、製作された時期の下限を明治前期末 1882（明治 15）年頃と推定している。

当マキリ鞘では、この腹部縦溝は穿たれていない。上記の推定に単純に従えば、明治中期、ほぼ 19 世紀末期以降に製作されたとも考えられるが、腹部縦溝を設定しない鞘が松浦武四郎が収集した資料に含まれ、近世末期に出現し現存している（伊藤 1999）。これらのことから、本資料の製作時期の判定にはより慎重を期す必要があると考えられる。

鞘尻には水抜き穴が穿たれている。直径 7 mm のほぼ真円を呈する穴は、小刀の刃先を旋回させたものか、あるいはドリル様の錐を用いたのだろうか。検討留意したい。

## 2) 材料

器面は磨耗が著しく歴年の使用が窺える。古色が進行しており、樹種の特定は難しい。また木目年輪を読み取る事も困難であり、樹木のどこを部材に選択したかを判別できないのは残念である。正統的に柁目部材を選択したと推察されるが、留保しておく。

## 3) 構造

小刀本体の装着個所である鞘の鯉口内面には段差を設けていない。これは全木製アイヌ民族マキリ鞘を製作する正統的なつくりである。アイヌ伝統の製作法では、小刀の柄は微妙に taper をかけた整形がなされており、柄の表面は鞘内面で密着し、装填は緊密に固定されなければならなかった。こうした伝統を遵守した構造を保持している。

金属小刀本体が納まるべき鞘の奥は小刀刃よりやや広めに穿たれる。内部空洞は鞘尻への水抜き穴へと貫通している。

#### 4) 紋様

ほぼ全面に施された彫刻紋様の本来の形象はかろうじて判読できるものだったが、図1の実測図では明瞭に描いた。

鞘の右面と左面で紋様全体の企画は統一されている。伊藤務氏が明らかにしたクナシリの名工シタエホリ(シタエパーレ、杉本出目平)製作鞘の作風であり(伊藤 1996, 2004)、アイウシ曲線によって器面を広く区画化し、その鯉口附近の突端部分を装飾的な植物紋様にするものであった。

この紋様意匠の起源は、レブンカムイ(沖・に居る・神=鯨)を象徴する曲線山形と、その紋様の頂点で発展する相対モレウ(渦巻き紋)であり、近代的装飾の印象を呈しながらもその実態は、アイヌ文化伝統を正しく継承するものである(戸部 1994b, c)。

当鞘ではこの区画内部の紋様は、右面と左面では中心部分に配置するモチーフを違えて、変化の妙を凝らしている。

左面は、和人文化から導入したであろう3種類の家紋を部分的に重ねて立体レリーフ状に彫りあげている。中央は剣片喰、その両脇には左三巴と角立四つ目が彫られている。また家紋周辺を取り囲む地紋は斜行格子刻紋である。

右面は魚の形象、吉祥紋様としての鯛を表現したものであろう。これは明らかに和人文化を受容し

たものである。鯛の魚体に注目すると切線格子内鱗紋(いわゆる鱗紋)で飾られており、注意が必要である。

鯛の周辺を取り囲む地紋は、魚網の網目紋と考えられる。

現存する他の多くのシタエホリ作風鞘では、中心意匠を取り囲むアイウシ曲線で区画化した内部は、地紋として鱗紋と呼称される切線格子内鱗紋が細密に彫られる。この紋は近代への転換期に開発され、それまでの伝統的地紋であった斜行刻線紋に替わって盛んに用いられ、今も盛行している。

ところが当鞘ではそのどちらでもない斜行格子刻紋であり、注目すべき特徴である。

鞘尻附近と鯉口附近には、擬縄帯紋様を周回する。一木造りが盛行する以前の木鞘制作方法は、二分割木材を再び紐やカリパ(桜樹皮)で結束していた。その慣行を、一木造り技法が安定確立してからも彫刻紋様で再現したものである(戸部 1993c)。紐縄の結束力に依拠し、器物損壊を防ぐ呪力をこの紋様に付託した思いを読み取りたい。

#### 資料1の考察

特徴が共通する資料として斜里町立知床博物館が所蔵するマキリ鞘があり(戸部 1993a)、図3に示す。また両者の諸要素の比較を表に示す。これらに共通する要素は以下ようになる。

①使用された地域が知床半島の東西海岸部であり、漁場が隣接連続する。

表. 資料1と斜里町資料のマキリ鞘諸要素の比較。

	資料1	斜里町資料
所蔵	山根正一(羅白町)	斜里町立知床博物館
使用された地域	知床半島東岸(羅白町)	知床半島西岸(斜里町)
大きさ	176×65×19 mm	173×77×23 mm
中心意匠	剣片喰、角立四つ目、左三巴/「鱗紋」鯛	剣片喰、角立四つ目
区画化様式	曲線を開き植物風装飾	曲線を閉じる
区画内部の地紋	斜行格子刻紋	斜行格子刻紋
鞘両端部の刻紋	擬縄帯	擬縄帯
鞘尻の水抜き穴	円形、直径7 mm	細溝状
その他・備考	磨耗と古色が進行	根付として「鱗紋」鯛

- ②大きさが極めて近似する。完成した鞘をどのような直方体に納まるか検討すると、長さで3mmの差異は極めて近似する数値といえる。
- ③和人の家紋を模す中心意匠は剣片喰、角立四つ目が共通する。
- ④羅臼資料に施された吉祥紋様としての鯛の魚体に対応し、斜里資料では附属する根付に同一意匠の鯛がある。しかも共に切線格子内鱗紋を施している。
- ⑤鞘中央に大きく紋様区画設定する企画が共通する。羅臼資料はレブンカムイ象徴紋様由来するシタエホリ作風を忠実に継承保持しており、より早く製作されたと判断される。
- ⑥鞘両端部への擬縄帯配飾は、一般的なマキリ鞘紋様の共通要素ながらも右繕り・左繕りを併置する工夫が共通する。
- ⑦鞘尻水抜き穴の形状は異なる。斜里資料の細溝穴設定は工作技法を新たに確立した成果と考えるとき、明治中期後半以降だろうか。

以上の諸点を勘案すると、私は2本のアイヌ民族マキリ鞘は同一人物が製作したと判定する。製作年代は腹部縦溝が穿たれぬことからともに明治中期と推定したいが、切線格子内鱗紋が魚体を飾る紋様だけに限定して施される特徴—それは明確に魚の鱗を表現するものと言える—から、この彫刻紋様の初期使用例と判断すれば、明治前期まで遡って考えたい(萱野1990)。即ち19世紀後半と判定する。また羅臼資料がより古く、同一作者による斜里資料に先立つ製作であったと判定する。

なお、中心意匠に和人家紋を受容する創意について考察したい。私は家紋を受容する以前の、18世紀前後にアムールランドを中心に広く樺太アイヌ社会まで浸透した、巫術に用いられる透かし彫り金属円盤使用の習慣が重要だと考えている(戸部1994a)。

この金属円盤が分布する南限は、北海道網走のモヨロ貝塚上層で発掘された近世アイヌ墓副葬品(図6)にあった。北海道開拓記念館や北海道大学農学部博物館に所蔵展示されるシャーマンの帯には、類似する透かし彫り金属円盤が縫い付けられている。モヨロ貝塚上層アイヌ墓から発現した18世紀末頃と考えられる同資料1点は、複数

のガラスダマと一括してシトキとして使用されていたと考えられている(菊池1995)。大塚(1993)はこれを口承芸術に語られたサマイェシトキと判定して論じており、筆者もこれを支持する。

透かし彫り金属円盤は、樺太アイヌ社会では女性シャーマンの腰帯に縫い付けられる(金田一・杉山1941;山本・知里1970)。樺太アイヌ女性は必備の巫術道具だった。腰帯には小刀鞘も必備であったし、必ずしも小刀本体が無くとも鞘は不可欠だったようである。私はそうした服飾習慣の心理面への反復強化が、やがてマキリ鞘紋様に金属円盤の形象を取り込む創意に発展していく条件となったと考えている。当鞘紋様で、斜行刻線紋を充填した二重円紋が、巫術の金属円盤の記憶を遺存している傍証と認識するものである。透かし彫り金属円盤の供給が滞り、替わって和人家紋へと置換されたのではあるまいか。

この考察に立つ時、二重円紋内部に家紋もしくはそれに似る紋様を充填した鞘は樺太アイヌ文化圏、もしくはそこと盛んな交流が可能であった北海道の限定された地域で開発された可能性があるだろう。

オホーツク海沿岸、紋別郡上湧別町にも明治前期に製作されたアイヌ民族マキリ鞘が伝世現存し、器面中央部には円紋を模したような三つ巴紋がある(上湧別町文化センターTOM蔵)。

金田一・杉山(1942,1943)に紹介された千島アイヌによるマキリの柄と鞘にも二重円紋が認められた。あるいは、色丹島への強制移住後の製作品なのだろうか。千島アイヌの文化までもこの種の紋様意匠が受容されていたのだ。

斜里資料、そして羅臼資料で明らかになったように、北海道においては明治前期頃のオホーツク海沿岸、知床半島東西の漁業社会にあつてかかるマキリ鞘が使用されていた意味は重いと考える。

## 資料2の分析

### 1) 形状

典型的な全木製アイヌ民族マキリ鞘の外形状であるが、湾曲が穏やかである(図2)。当然ながら鞘内部に装着されたであろう小刀本体も、刃部は直状に近く湾曲が穏やかだったろう。鞘尻には水抜き穴が穿たれている。

木綿紐を編んで下げ紐とし、端末部ほぼ 11 cm 位置に木製の根付を附属する。このように民具に木綿紐を使用する習慣が開始された時期の検討は、個別の民具種類で異なるだろう。私は、近代北海道漁業社会での具体的な経緯を考察するに、鯨場でのモッコに注目している。モッコに付随する担ぎ紐の素材が、何時どのように変わっていったか興味深い。

根付の樹種は鞘と同一であり、一括して製作されたものと判定する。この根付は平行四辺形の鋭角頂点部分を削り取った変形する六角形で、現存するマキリ鞘群にほぼ同様な形状の根付を有する例があり、この種意匠の分布範囲や製作された時代を考える参考資料となる。

また、下げ紐は短めの印象を受けるが、この程度の長さが実用的だったのではないか。近代のアイヌ民族マキリ鞘資料に使用時のままに残された長さとして注目できる。

## 2) 材料

鞘の鯉口から鞘尻方向に、左右器面に細やかに平行して走る木目が明瞭に見える。木目特徴から判断すると、樹種はピンニ(ヤチダモ)と判定するが、セン(ハリギリ)である可能性もある。部材選択はやや正位置からずれてはいるが柾目材を選択している。柾目部材選択は正統的な全木製アイヌ民族マキリ鞘製作法である。

## 3) 構造

鯉口部分の内面は平滑であり、内面に段差は設定されていない。伝統的で正統的な全木製アイヌ民族マキリ鞘の構造である。

鞘尻には、ほぼ楕円形 6×7 の大きさで水抜き穴が設定されている。

内部は、マキリ(小刀刃)本体が収納される部分をやや幅広く穿つ。より古く明治前期に製作された鞘では、ほぼマキリ本体の厚さに近いのだが、当鞘では幅広であり、ここは製作時代が下った痕跡となっている。

## 4) 紋様

彫刻紋様が一つも施されない無紋鞘である。彫刻紋様が施されないことで、素材となった樹種固有の明瞭緻密な木目がより鮮明になっている。

アイヌ民族マキリ鞘には、精緻な彫刻紋様で器面が飾られるのが一般的と信じられているが、実際には無紋鞘は少なからず伝世品として現存する。筆者も腹部縦溝で無紋の全木製アイヌ民族マキリ鞘を 1 点保有している。その樹種はトペニ(イタヤカエデ)だった。

北海道大学農学部博物館には、腹部縦溝鞘で使用者の焼印が無紋器面に押捺された小刀鞘完備資料があり、側面に焼印が押捺されているが、同位置に焼印が押されたアイヌ民族マキリ鞘は、少なからず伝世現存している。それらが労働現場で用いられていた時に、和人使用者が押捺したものでらう。

伝世する現存資料から、すでに明治前期には無紋の全木製アイヌ民族鞘が製作されており、使用されていたと考えられる。

## 資料 2 の考察

このように、現存する近代のマキリ資料群の中に、器面に彫刻紋様を施さない無紋鞘が少なからずあるという事実は重要だろう。無紋の全木製アイヌ民族マキリ鞘を製作する創意は、アイヌ民族マキリ鞘に、無紋を排除しない思惟が醸成されてきたからこそ、近代の期間を通じて継続的に製作されたと考えられる。

近世場所請負制度下の「場所」から継続する北海道漁業社会において、小刀は労働作業に不可欠であった。常時身に帯びる為の鞘である。アイヌ民族の思惟では彫刻紋様を熱望するのが当然だろう。

しかし、無紋鞘が少なからず伝世現存する事実を考えると、「無紋を排除しない」ではなく、より肯定的に「木目が醸す美を、『粋』と感ずる共有価値観に照らして期待する」明確な思惟が再生産されていたようにも思われる。

筆者は無紋の全木製アイヌ民族マキリ鞘を他に 2 本保有している。1 本は大正期製作と推定される、小刀本体と鞘が揃った皮革刃用と思われるもの。そしてもう 1 本は資料 2 と同じくピンニ(ヤチダモ)を樹材とした小刀と鞘が揃ったマキリである。大正期に製作されたと推定でき、器面古色の進行が柾目部材の平行木目を際立たせている。

筆者は他にも、明治後期から大正期に製作されたと判定しうる無紋のチクペニ(エンジュ)で製

作された全木製アイヌ民族鞘を実測した経験があった。やはり柾目部材の平行木目が鮮やかで、彫刻紋様が無いことが民具独特の美をより強烈に醸していた。製作者が無紋とする意図を抱いてこの樹材を選択したと筆者は考えている。

このような無紋の全木製アイヌ民族マキリ鞘資料は標津町立歴史民俗資料館にも1点所蔵されている(図4)。地元で使用された漁具資料として位置づけられているもので、その小刀本体は近代工業製品のサバサキ間切が納まる。近代北海道漁業社会で培ってきた、文化変容と異文化融合が反映した資料と評価したい。

筆者は、それらがアイヌ民族と和人漁業労働者が共に生活する漁業社会で、主にアイヌ民族男性によって製作されたが、しかし使用者はアイヌ民族男性に限らず、むしろ和人漁師がより多かったように思う。紋様に民族的な identity を求めず、道具としての利便性を求める和人漁師としての思惟ゆえである。

以上の考察から、筆者は資料2として紹介した無紋の全木製アイヌ民族マキリ鞘が製作された時期を昭和前期の前後と考える。言い換えれば20世紀前半と判定する。

## まとめ

近世以来、モシリ—北海道の漁業社会で用いられた全木製アイヌ民族マキリ鞘は、明治前期末において形状と構造が高度に完成されたものとなっていた。小稿で紹介した知床羅臼で製作使用された2点のアイヌ民族マキリ鞘は、こうした時代に続く時期に製作された、完成された形状と構造を有するものと評価しうる。

21世紀の現代にあっては、漁師が使用する knife は直状刃部を有するサバサキ間切が普通である。

近代への転換点から150年の期間を通じて、刃部が湾曲するマキリが直状小刀へ置換されていく経過は、漁業の現場が必要とする仕事内容に適合するからだろう。伝統的なアイヌ文化にあっては、陸獣か海獣を問わず毛皮と獣肉を適切に解体処理する上で最適な、湾曲形状の小刀が必備である。しかし近代漁業文化では、漁獲物の解体処理行程や処理する際の留意点はアイヌ伝統文化とは異なる。魚網や太い綱を切断加工する作業も複雑

化していく。作業に必要とする小刀の形状が変化するのは当然であった。

標津町歴史民俗資料館の資料に明らかな鞘形状は、伝統的なアイヌ文化の成果を継承しつつも、納められる小刀の形状は直状に替えられているものだった。

近代における次の段階は、鞘さえも直状鞘へと改変される。この趨勢は避け得ない。

大正期にはアイヌ民族男性の手技で直状鞘が生み出されていた。開道五十周年を期した「北海道原始文化展」において、当時のアイヌ工芸の精華を誇るものとして製作され出品された直状マキリ鞘が複数現存する。代表例には児玉コレクション(60457)がある(アイヌ民族博物館1989)。現存資料の観察からこの種のマキリ鞘の幾つかは、漁業現場で実際に使用されたようである。展覧会用とは別に、労働現場での使用を前提に製作されたものだろう。

金田一・杉山(1943)はそうした直状鞘の創意は、サハリン(樺太)在地の漁労民族ニヅフが製作使用する小刀鞘の形状を受容したものと指摘している。金田一・杉山(1943)を参考に筆者は現存する直状鞘資料群から約50本を抽出し、(1)形状、(2)構造、(3)紋様、を観察し編年化した結果、最古の形式は樺太アイヌ製作の木製直状マキリ鞘(国立民族学博物館蔵K2579、K2574)と、(1)形状と(2)構造が酷似し、金田一・杉山(1943)を支持する結果となった(アイヌ文化振興・研究推進機構2004)。

こうして新たに開発されたそれら直状鞘の器面には、アイヌ民族伝統の彫刻紋様が施されるとは限らず、和人好みの吉祥紋である松竹梅や鶴亀が夥しく導入され、急速に受容愛好されていった(戸部1993b)。無紋鞘さえも多数現存する事実は興味深い。

鞘を製作する男性としては、手技が優れた和人漁師男性が知人からの依頼を受けて製作するようになっていく。直状鞘を数多く観察すると、漁業現場の労働作業を経験する者が作業実態に即して形状や構造の利便性を高め、改良を重ねていった過程が明らかになる(山根・戸部2006)。

## おわりに

小稿で紹介した2本の全木製アイヌ民族マキ

リ鞘を保管する山根正一氏は、現代の直状鞘たる鞘間切(さやまきり)を製作して地元の漁師仲間、現在に至るも日常的に提供している(山根ら2008)。漁師としての積年の経験に裏打ちされた間切(まきり)への造詣は深い。労働の現場を知る者が、現場の需要を的確に把握して、最良の道具を製作する。物を作り出す叡智が、北海道の漁業社会に確かに継承されていると知れる。

## 引用文献

- アイヌ文化振興・研究機構(編). 2004. 樺太アイヌ民族誌 工芸に見る技と匠. 140 pp. アイヌ文化振興・研究機構, 札幌.
- アイヌ民族博物館(編). 1989. 児玉資料目録 1. 192 pp. アイヌ民族博物館, 白老.
- 伊藤務. 1996. エトロフの名工, シタエホリ幻のマキリについて. 標茶町郷土館報告 9: 1-20.
- 伊藤務. 1999. 松浦武四郎, 愛用のマキリ(小刀)について. 標茶町郷土館報告 12: 37-55.
- 伊藤務. 2004. 民具図録 続アイヌの工芸世界 彫工, シタエホリ. 105 pp. マキリミュージアム, 札幌.
- 大塚一美. 1993. 首飾りと巫術. 北海道チャシ学会研究報告 7: 27-45.
- 萱野茂. 1981 (復刻 1990). パスイは生き物. 40 pp. 北海道ウタリ協会, 札幌.
- 菊池俊彦. 1995. 北東アジア古代文化の研究. 544 pp. 北海道大学図書刊行会, 札幌.
- 金田一京助・杉山壽榮男. 1941 (復刻 1973). アイヌ芸術 1 服装篇. 48 pp. 北海道出版企画センター, 札幌.
- 金田一京助・杉山壽榮男. 1942 (復刻 1973). アイヌ芸術 2 木工篇. 68 pp. 北海道出版企画センター, 札幌.
- 金田一京助・杉山壽榮男. 1943 (復刻 1973). アイヌ芸術 3 金工・漆器篇. 59 pp. 北海道出版企画センター, 札幌.
- 佐々木利和(編). 1992. 東京国立博物館図版目録 アイヌ民族資料篇. 286 pp. 東京美術, 東京.
- 戸部千春. 1993a. 斜里のアイヌ民族マキリ鞘. 知床博物館研究報告 14: 55-62.
- 戸部千春. 1993b. 東アジア列島北辺の直状小刀鞘. トカプチ 7: 1-58.
- 戸部千春. 1993c. 全鹿角製及び鹿角部品併用マキリ鞘概観. アイヌ文化 18: 1-17.
- 戸部千春. 1994a. 多花弁状文透し彫り金属円盤シトキ考. 北海道チャシ学会会報 39: 1-6.
- 戸部千春. 1994b. パスイ集成・基礎分類篇—北見市・妻沼コレクションによる—. 紋別市立博物館研究報告 7: 27-68.
- 戸部千春. 1994c. パスイ集成・斜里町立知床博物館篇. 知床博物館研究報告 15: 27-46.
- 戸部千春. 1997. アイヌ民族マキリ鞘の形式変遷図説. 48 pp. 研究会いたやかえて, 北見.
- 野村崇. 2000. 北の考古学散歩. 301 pp. 北海道新聞社, 札幌.
- 山根正一・戸部千春. 2006. 羅臼町岬町・山根正一が語る「鞘間切・さやまきり」とつかり 26/27: 15-22.
- 山根正一・山根千津子・戸部千春. 2008. 『鞘間切』は定置で働く者の粹. モヨロ 42: 10-11.
- 山本祐弘(著)・知里眞志保(協力). 1970. 樺太アイヌ・住居と民具. 262 pp. 相模書房, 東京.
- 吉田常吉(編)・松浦武四郎(著). 1984. 新版蝦夷日誌 下. 335 pp. 時事通信社, 東京.



図1. 一木造りアイヌ民族マキリ鞆実測図(資料1). 176×65×19 mm, 有紋, 旧所有保管者: 泉澤清人(北海道目梨郡羅臼町).



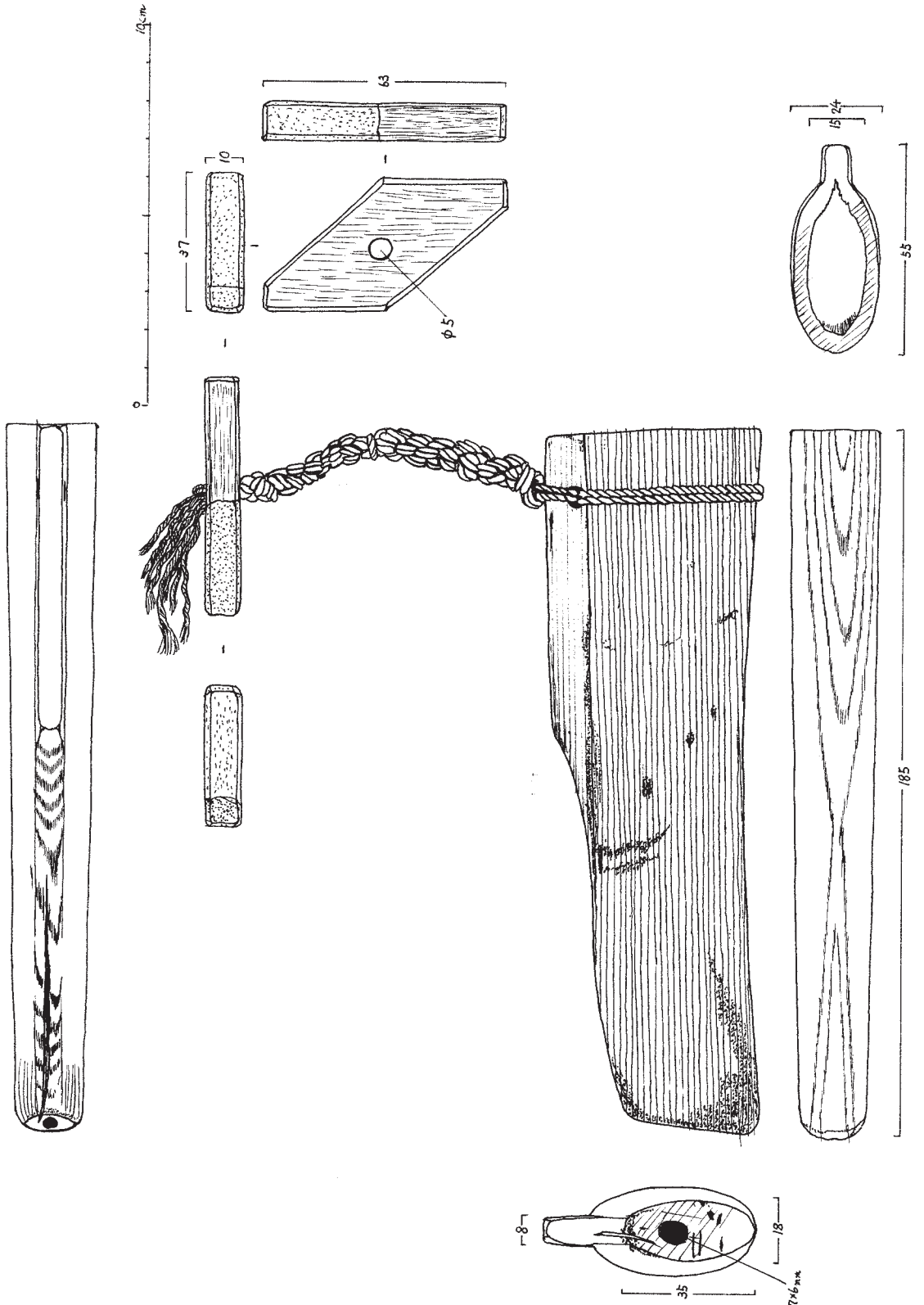


図 2. 一木造りアイヌ民族マキリ鞘実測図 (資料 2). 185 × 55 × 24 mm, 無紋, 木製根付, 木綿組紐 14 cm. 旧所有保管者: 黒川久由 (北海道目梨郡羅白町).

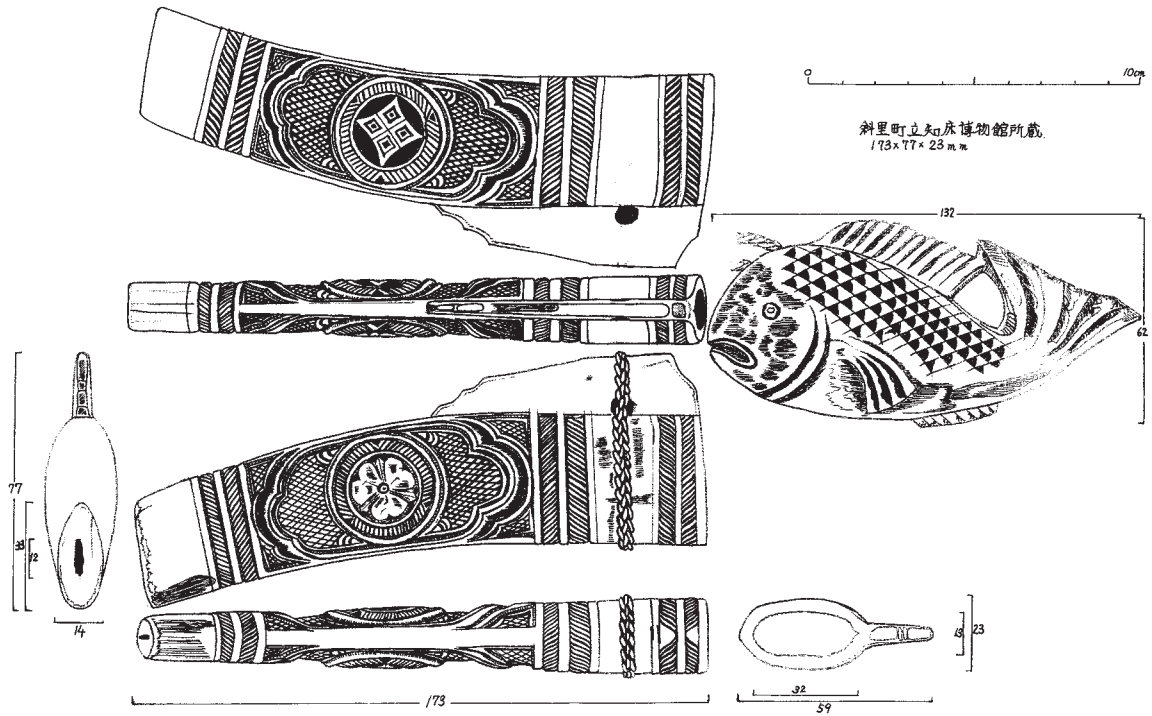


図3. 斜里町立知床博物館蔵マキリ鞘.

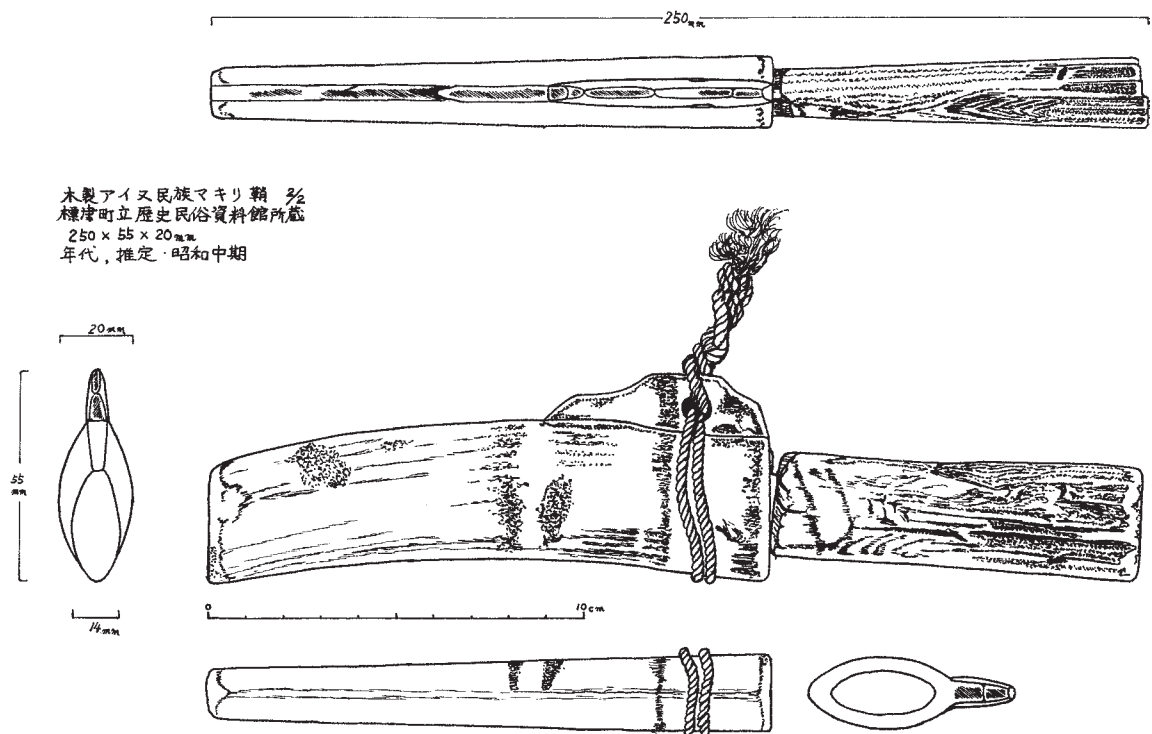


図4. 標津町立歴史民俗資料館蔵マキリ鞘.

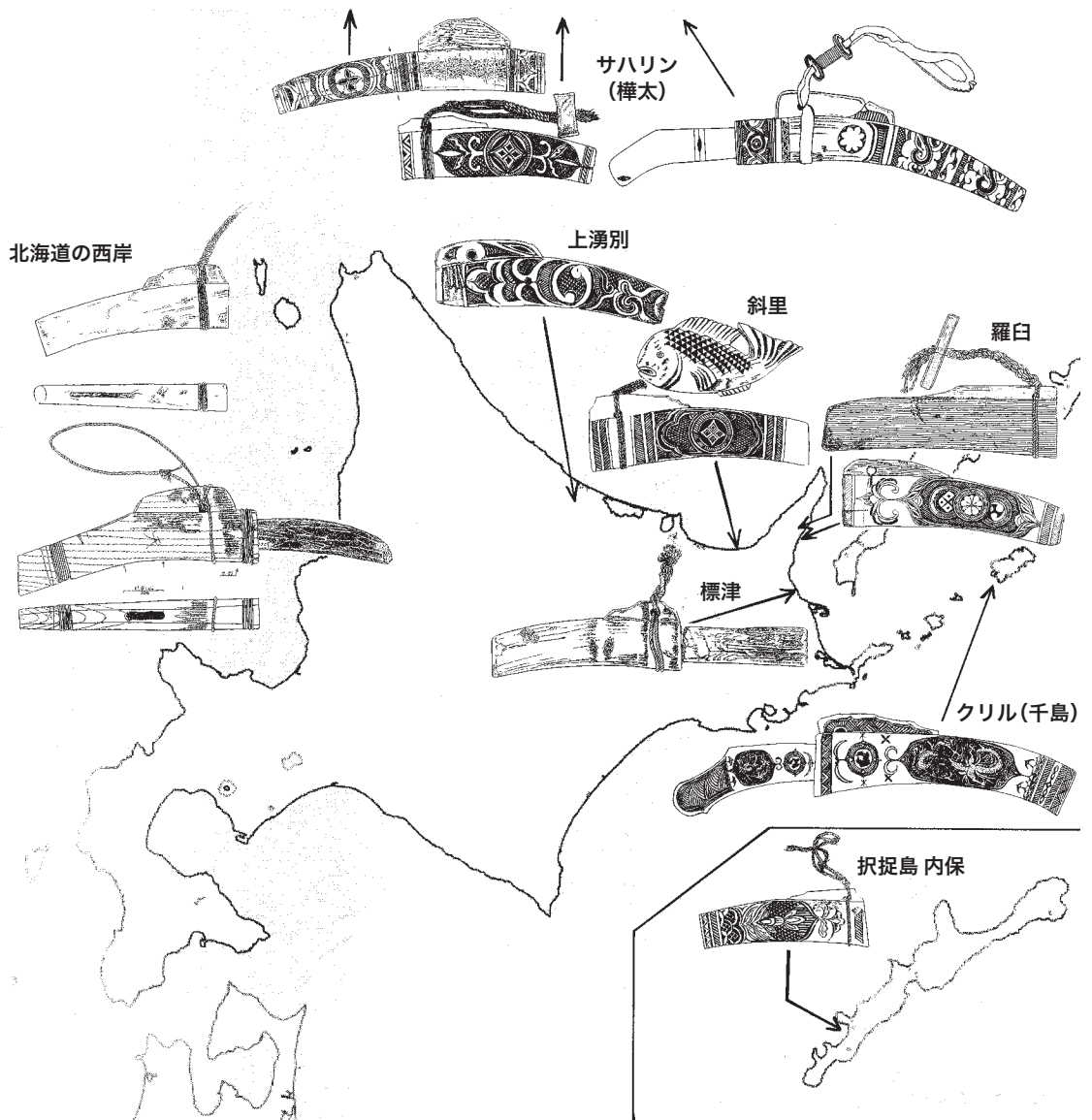


図 5. 関連するマキリ靴の使用地.

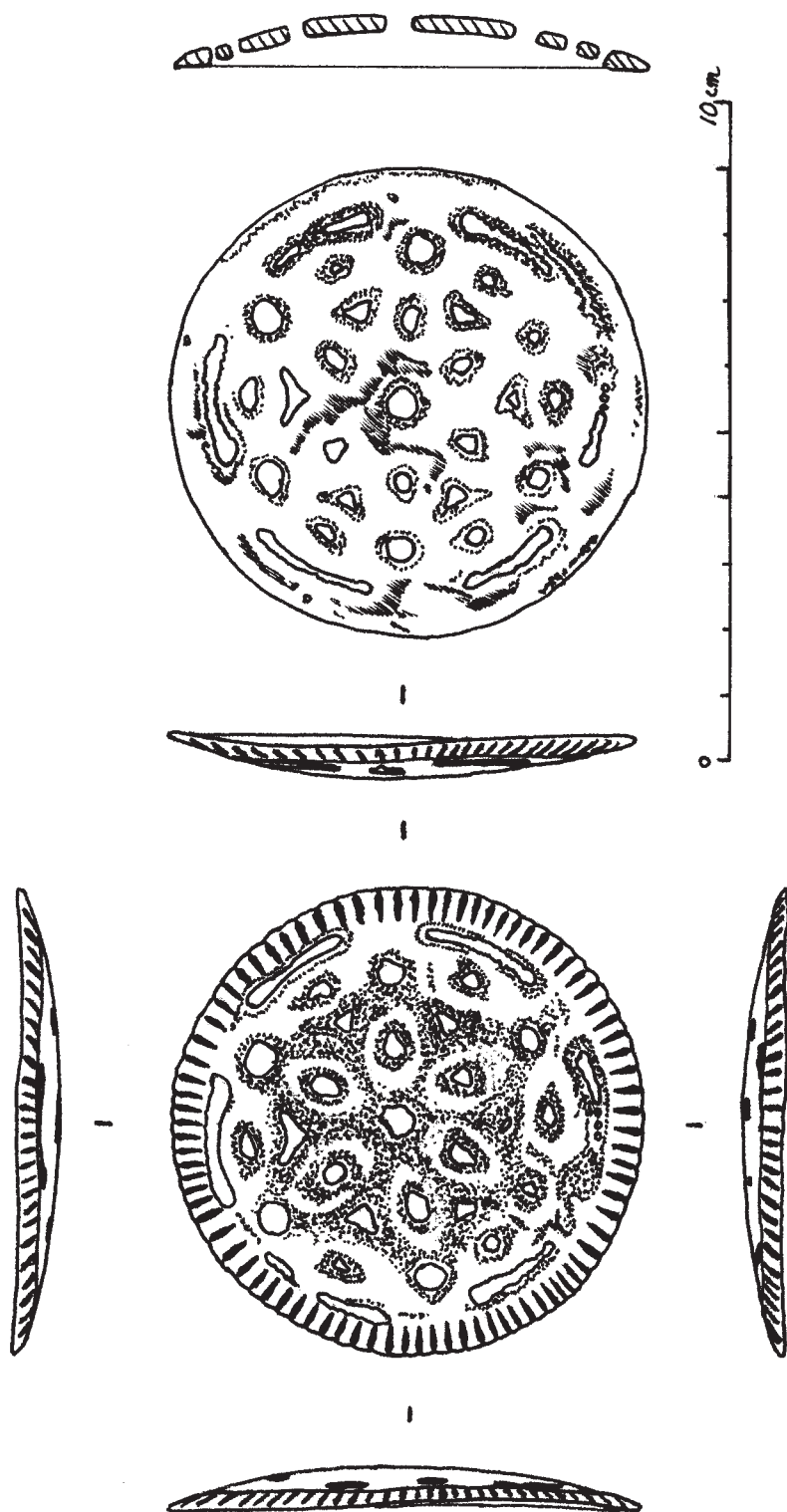


图 6. 網走市モモロ貝塚上層の近世アイヌ墓副葬品「透し彫り金属円盤」, 72 × 71 × 8 mm. 網走市立郷土博物館蔵.